



1月11日のラグビー大学選手権の決勝。初優勝した天理大学の主将の泣きながら絶叫するインタビューが印象的でした。



「部員全員が本当によく我慢をして、周りの方に支えていただいたおかげで、ここまで来ることができました！」

昨年8月、天理大学ラグビー部の寮で62人というコロナの集団感染が起きました。1カ月の活動停止。それ以上に彼らを苦しめたのは世間からの中傷。ネットには根も葉もないうわさがあふれ、教育実習やアルバイトで、ラグビー部と関係のない天理大生まで受け入れ拒否という社会問題にまで発展しました。犯人捜しもあったかもしれません。部は空中分解してもおかしくない状況だったといいます。でも、そこには子供たちを守る為に、あちこちに頭を下げて回った大人の姿がありました。9月に練習を再開した時、松岡主将は部員を集めて次のように話したといいます。



「練習を再開できたのは自分たちだけの力じゃない。監督が周囲の厳しい声を受け止めて、いろんなところに頭を下げてくれたから。感謝の気持ちだけでは足りない、今年こそ日本一をとるために頑張っていこう」

僕はよく社員研修等で「情報の共有」とか「目的の共有」とかお話しさせていただくことがあります。でも、「痛み」を共有することが一番心の奥底に刺さり、強い絆が生まれるのではないのでしょうか。

今は、経営者の方、従業員の方もコロナ禍、大変なご苦勞をされていることと思います。でもこの辛い時だからこそ、自分の仕事の大切さや会社やチームの存在意義について、みんなで思いを寄せてほしいのです。しっかり今の「痛み」を共有して、改めて仕事や会社の「目的」を共有し、チームとして「思い」を共有する。



仕事がある、仕事ができる喜びを感じる事が、コロナの後の時代のV字回復のエネルギーに必ずなることでしょう。(^^)/

新型コロナについては、ウイルスの新たな変異株が発見されたり、いよいよ医療体制がひっ迫してきたり、みんなの不安と我慢の時間が続いています。



今の新型コロナによる混乱は、きっと近い将来、歴史の教科書に載ることでしょう。

いつかコロナを知らない子供たちから「新型コロナ」のことを聞かれた時に、「あの時は仕事も大変だったし、生活も不自由なことが多かったけど、みんなで我慢して助けあって乗り切ったんだよ！」って、「痛み」も、そしてこれからの「復活」も、次の世代に伝えることができるよう、頑張らなくてはと思っています。

少し前のこと、バスに乗っていた時、国立循環器病センターの近くにさしかかりました。その、もう20年以上前のこと、まだ赤ん坊だった娘の心臓に疾患が見つかり、循環器病センターに入院しました。泣き叫ぶ娘を看護師さんに託して家に帰る時の辛さは今でも忘れられません。

(幸いにもたいしたことはなく、今に至っています。)

そんな当時のことを思い出していたら、僕のすぐ後ろの席に座っていた母と娘(中学生くらい)と思しき2人の会話が耳に入りました。

「ほらあなたの別荘が見えてきたよ。」

「あはは。あの3階の右から〇番目やったなあ。懐かしいわあ。」

「〇か月おったもんね。先生や〇〇さん、元気してるんかなあ」



明るく話す声の持ち主の母娘(おやこ)は、次のバス停「循環器病センター前」で降りて、仲良く、そして嬉しそうに歩いていきました。きっと大きな苦しみと悲しみを分かち合った母娘なのでしょう。

今月号の表紙の写真はだいぶ前に行った京都・三千院のわらべ地蔵です。

お地蔵さんは、子どもの守り仏、守り神だそうですね。

幸せそうに連れ添う母娘をバスの中から横目で見て、僕はお地蔵さんのことを思い出しました。子どもを思う、お地蔵さんの気持ちに触れたような気がしたからです。

やせますように
背が伸びますように
足が長くなりますように

